

「東日本・家族応援プロジェクト+2025」を開催しました

人間科学研究科教授 村本邦子

「東日本・家族応援プロジェクト+（プラス）2025」を8月28日（木）から9月1日（月）の4泊5日で開催しました。今年は院生6人、総勢10人で、おおまかなスケジュールは下記のとおりです。

	場所	内容
8月28日（木）午後		各自フィールドワーク
夜	白河市	プロジェクト白河①
8月29日（金）午前	白河市	プロジェクト白河②
午後	福島市	ビーンズ福島みんなの家訪問
8月30日（土）午後	新地町	みやぎ民話の会・新地語ってみんな会との交流会
夜	南相馬市	「おれたちの伝承館」訪問 多賀城市丸山さんとの交流会
8月31日（日）	福島県沿岸部	沿岸部スタディ・ツアー①
9月1日（月）	福島県沿岸部	沿岸部スタディ・ツアー②

今年も多くの方々のお世話になりました。まずは、白河でのプロジェクトを共催くださったNPO法人しらかわ市民活動支援会のみなさんに感謝します。今年は、7月7日から8月30日にかけて、白河市表郷公民館、棚倉町立図書館、白河市東文化センター、白河市立図書館の4館で巡回漫画展をして頂きました。多くの方の眼に触れ、喜んで頂けたと聞いています。一日目の交流会では、白河に避難されている渡辺久子さん（富岡町出身）と永岡真由子さん（大熊町出身）の貴重な証言を聞く機会を設定して頂きました。とても個人的で繊細な内容まで共有していただき、院生にとってはもちろんのこと、2011年から福島に通い多くの方のお話を聞いてきた私たちにとっても大切な経験となりました。これもひとえにNPO法人しらかわ市民活動支援会とお二人との信頼関係があればこそだと思います。

二日目のプログラムでは、小磯厚子さんと鶴野先生による「わらべうたと伝承遊び」で白河のみなさんと楽しいひと時をご一緒し、団先生の漫画トークではみなさんと一緒に家族のこと、社会のことを考え、語り合いました。プロジェクトとしてプログラムを開催するのはこれで最後となりますが、今後もみなさまとの交流の場を継続できたらと考えています。

終了後は白河市から福島市に移動し、NPO法人ビーンズふくしまの「みんなの家」を訪問しました。「プロジェクト+」から開催地を福島から白河に移したために、久しぶりの訪問となりましたが、「みんなの家」は以前より大きな施設となっており、元気な子どもたちの姿が見えました。中鉢博之さんが「ビーンズふくしま」の事業紹介とともに、福島の子ど

もたちの状況を聞かせてくれました。

3日目は新地町に移動し、みやぎ民話の会と新地語ってみんなのみなさんとの交流会でした。今年は観海ホールで、101歳になる小野トメヨさんのお話を聞き、みなさんと交流を深めました。楽しいひととき、そしてトメヨさんのパワーに圧倒され、トメヨさんの前ではヒョッコのような私たちは、まだまだ頑張らなければいけないのだと気合いが入りました。その後、南相馬に移動し、おれたちの伝承館を訪問しました。昨年までプロジェクトを主催してくれていた丸山隆さんが多賀城市から合流し、夜は院生たちに震災当時の話や防災についてお話してくれました。

4日目と5日目は、おれたちの伝承館館長であり、写真家でもある中筋純さんのガイドで沿岸部スタディ・ツアーを実施しました。津波被害のあった海岸やイノベーション・コースト、富岡町メガソーラー発電所 SAKURA、原子力災害伝承館や請戸小学校などのコースに加え、今回は、大熊町町会議員の木幡ますみさんのご厚意で、防護服を身につけて制限区域内にあるご自宅を案内してもらい、友人を亡くされた場所でもあるという第一原発の温排水を利用したヒラメ養殖場跡を見学しました。養殖場の存在は初めて知りましたが、木幡さんが語る皮肉なエピソードに言葉を失いました。津波の爪痕が今なお残るそこには真っ白な鉄砲百合が咲いていました。院生たちが、それぞれ詳細な報告をしてくれています。

私自身は、集合前に、双葉町で原発事故を経験したご夫婦のお話を聴く機会がありました。原発の間近で経験された話です。爆発音を聞いたと思ったら、それぞれに白い粉、黄色い粉が全身に降り注いだという話や、病院の重症患者に付き添って乗った軍用ヘリコプターが荷物口を開けたまま飛んでいた話、お湯のシャワーで全身を洗い流す除染など、まさに戦場を思わせる凄まじい話でした。3時間聴いてもとても聴ききれず、あらためてまたお話を聴きに伺う決意をしています。

白河で聞かせて頂いた話も忘れ難く、強烈な話ばかりでした。渡辺さんのお父さんが行方不明になり、避難先の新潟から米袋を引きずり自宅まで戻ろうとしているところを三春町で警察に補導され連絡がきたという話や、現状を見てもらおうと故郷に連れて行ったところ、一面メガソーラーで鍵を開けてもらわなければ自宅にも入れないという現実直面して、それからは飲むことも食べることも拒否して餓死した（死因は老衰とされた）という話に、直接見た光景ではありませんが、そのイメージが浮かび、瞼の裏に刻まれて消すことができません。震災当時、高校を卒業したばかりだった永岡さんは、小学校の時に学校で繰り返し読んだ『はだしのゲン』から原発事故を恐れ、いざ避難となった時には、もう二度と戻れないだろうと貯金通帳や印鑑まで持って逃げたそうです。多くの方々が、すぐに戻れるだろうと着の身着のままに近い状態で避難したと聞いていたなかで、そんな人もいたことに驚かされ、怖ろしい現実であってもきちんと直面する力を育てることがいざという時に生きてくるのだと痛感しました。

今回は、双葉町、大熊町、富岡町という原発立地地域で地震・津波・原発事故を間近で経

験した方々のあの日の体験を聴かせて頂き、また言葉の端々から現在置かれている状況をごく僅かですが垣間見ることができて、15年通いながら頭の中に描いてきた原発事故を理解しようとするジグゾーパズルに少しずつピースがはまっていくような感覚を覚えています。それぞれのピースは14年以上経過しているにも関わらず、非常に詳細で生々しい記憶であり、トラウマティックな記憶としてそれぞれの方のなかに保持されてきたのだと感じました。こんなふうに、長い間、聴き届けられないまま水面下に沈められている記憶、あるいは被災者だけにすべてを背負わせてきた記憶はきっと無数にあるでしょう。それらの記憶は、しっかりと耳を傾けられ、共有され、記録することを求めているはずです。民話の会の方々がおっしゃっていることですが、聴く人がいなければ語られることなく、物語は消滅していきます。これほどの大きな事故を経験した時代を共有する私たちは、できる限りひとつひとつの声に耳を傾け、その物語を歴史に刻んでいく責任を負っていると思います。多くの方が参加して一緒に取り組んでいくのであれば、とても実現できない課題です。今後どのような形で活動を続けていけるか、私の大きな宿題だと思っています。

お世話になりました皆さま、本当のありがとうございました。最後に中筋純さんが撮ってくださった写真を掲載します。最後はドローンを飛ばして、福島第一原発を上から見せて頂きました。



2025 福島 人間科学研究科客員教授 団士郎

ひとまず区切りの 2025 年プロジェクト。だからなのか、15 年を経て語られる機会を得たからなのか、新たな発見、気づきのある四泊五日の遠征だった。

中でも印象に残ったのは、帰還困難区域のご自宅に案内して下さった O さんに廃屋となった建物の前でうかがった話だった。



窓に向かってパーテーションで区切られた学習机のようなものが見えた。なぜこんな所に？と思って「あれはなんですか？」と問うと、「塾をやっていたのさ」。

そして話されたのは、東電正社員と、地元雇用の従業員、下請け、孫請け労働従事者の実態だった。当然、どの家の子も皆地元の小学校に通う。しかしそこには全員承知の親の会社員としての身分差がある。羨望の的は東電正社員。

そうではない家庭の親の期待は、子どもが東電の正社員になることである。そのためには学力を付けさせなければならない。とにかく勉強させて、良い学校を出して東電の正社員にさせたいと願う親の気持ちは了解できる。そんな事情を背景に、学習塾が存在した。

そこで子ども達はしっかり学び、よい高校に進学し、東京の大学に行った。だが彼らの多くの就職は東電ではなかったし、地元にも戻って来なかった。そしてその後、塾のあった家は、原発事故被災で住むことが出来なくなった。

このような経過をたどるものが私達の社会にはたくさんある。そこに手を付けなければ、場所を変えて、時代を超えて何度でも似たことが繰り返される。持てるものと持たざるもの軋轢は、災害とは関係なく、いろんなエピソードの中に含まれている。

「想起する主体」としての語り手となるために

文学部教授 鵜野祐介

はじめに

今年（2025）度のプロジェクトは8月28日から9月1日までの5日間のプログラムだったが、私は体調面の不安があったため30日の新地町までの3日間参加した。取材記録の中から、自主取材として28日午前の仙台市でお聴きした小野和子さん、同日夕方に白河市でお聴きした渡辺久子さん（富岡町出身）と永岡真由子さん（大熊町出身）、そして30日午後新地町でお聴きした小野トメヨさんと村上美保子さん、3つのパートに分けてこれら5名の方がたの歌と語りの概要について、私自身の雑感も交えながらレポートする。

1. 小野和子さん

1934年6月生まれの和さんは現在満91歳。岐阜県高山市で生まれ育ち、小野四平さんとの結婚後、宮城県仙台市で暮らすようになった。1969年から宮城県を中心にして東北各地で民話の採訪を続けてこられ、われわれのプロジェクトにも大きな影響を与えてきた「みやぎ民話の会」の顧問である。今回は、ご自宅に訪問して、同会会員の加藤恵子さんとお連れ合いの正範さん、和さんの長女・桂子さん（私の大学時代の同級生）の同席の下、「ひとりはさびし」というわらべうたを中心にお話を伺った。

ひとりは*¹さびし ふたりでまいりましょ
みわたすかぎり よめなにたんぽぽ
いもと（妹）のすきな むらさきすみれ
なのはなさいて やさしいちようちよ
ここへとまねく とおまでおいでなさい
ひいや ふうや みやさかじいさん
とつととあるけば ばあさんよろこぶ
おいでなさい おいでなさい



『みやぎ民話の会叢書 第一集 みやぎのわらべうた春夏秋冬』（1991）にも収められているこの唄は、宮城県栗原郡岩ヶ崎で育った佐藤義子さんから1989年から91年にかけて小野さんたちが聴き取り、書き留めた60余りのわらべうたの中の1編である（上掲の楽譜は本書より引用）。資料集を読み、この唄に不思議な魅力を感じた私は、3年前（2022年）にも小野さんに唄の背景などについてお聞きしたことがあるが、今回もう一度、歌っていた

¹ 「ひとりで」とも。

だくとともに、小野さんがこの唄についてどのように受け止めておられるのかについて改めて語っていただいた。



「私はこれを、手まり唄として聴きました^{*2}。これは東北に来てから聴いた唄で、私が生まれ育った飛騨高山で聴いたものではありません。最初の言葉の〈ひとりはさびし ふたりでまいりましょ〉をはじめ聴いた時、胸が一杯になって、涙がポロッと出るような感じがしました。なんてすごい唄だろう、なんて深い唄だろうと思ったんです。わらべうた、なのにね。ただ、わらべうたって、全

世界を含んでいるような、年寄りまで入っているような、境界線がないような唄がありますよね」。

手まり唄（またはお手玉唄）として歌われたということから、主な歌い手はお年寄りの女性、主な聞き手は幼い女兒だったと思われるが、この唄の一人称は誰だろうか。〈いもと（妹）〉をこの世に残して逝った少女だろうか。それとも先に逝ったお年寄りだろうか？

3年前、和子さんにインタビューした時は、お連れ合いの四平さんが亡くなられた二週間後だったこともあり、〈ひとりはさびし ふたりでまいりましょ〉の詞章に、私はお二人の姿をダブらせていた。この唄の一人称は、あっちの世界へ入ったばかりで、連れ合いに「一緒に行こう」と呼び掛けているのでは？と。いろいろな解釈が可能だろう。

今回、和子さんは「最近いろいろなことをすぐに忘れてしまうんです」と笑いつつ、歌詞のメモを見ることなく、最後までほとんど全部憶えておられた。数え唄になっており、「ひい、ふう、みい、よお……」につながる言葉で展開されているので記憶しやすいということも大きいが、その記憶力に感心した。先に述べた通り、和子さんがこの唄に出会ったのは、子どもの頃ではなく、民話の採訪を始めた30代後半以降である。前掲の佐藤義子さんの他にも、東北各地で何人もの方からこの唄を聴かせてもらったそうだ。娘の桂子さんによれば、自分が子どもの頃に母親はこれをよく歌っていたとのことで、この唄はいつしか小野家の「子守唄」になっていたのかもしれない。

大人になってからでは歌や物語を記憶するのは子どものようにはなかなか難しいと言われる。それは確かな事実だが、好きなものであれば何度でも繰り返して歌い、語ることができる。その営みは、たとえ年齢を重ねても、歌い継ぎ、語り継ぐことを可能にするのだろうと教えられた。

² 但し、同書の中では、佐藤義子さんは「お手玉唄」とおっしゃっている。

2. 渡辺久子さんと永岡真由子さん

28日午後、福島県白河市に移動し、宿泊ホテルの近くにあるマイタウン白河の会議室で、17時30分頃から2時間余り、渡辺久子さんと永岡真由子さんに、2011年3月11日の地震と津波そして翌日の原発事故後の罹災体験を伺った。当時、富岡町の病院で看護助手として勤務中だった久子さんと、大熊町の自宅にいた高校3年生だった真由子さんは、年齢も体験状況も異なるが、二人とも一致して、詳細に、目に浮かぶように、身振り手振りを交えつつ、かつ理路整然として、当日から約1ヶ月間の体験を語って下さった。あれから14年半の歳月が経っているとは思えなかった。初めて口にすることができた内容もたくさんあると後でおっしゃった。これまで誰にも語らなかつたこと、語れなかつたことが、こうして言葉にすることができて良かったとも。



お二人の語りの内容はここでは触れないでおき、こうした密度の濃い話を聴くことができた理由について推察してみたい。今回の語りの方が成立したのは、しらかわ市民活動支援会ひまわりひろばの両スタッフ、樋口さんや小磯さんと、久子さんや真由子さんとの間に築いてきた信頼関係、そしてまた私たち立命館大学の東日本・家族応援プロジェクトのメンバーと、両スタッフとの間に長年かけて築いてき

た信頼関係、この両方があってのことだと思われる。加えて、東北・福島から遠く離れた関西の大学から訪れた学生（院生）たちが、お二方の罹災体験を聴きたいと同席していることが大きく関わっているに違いない。若い人たちは是非とも伝えたいという熱意が感じられた。

久子さんや真由子さんのように、それぞれ自分一人だけの「小さな物語」を、言葉に紡ぐことなく、心の奥底に抱えて生きておられる方が今も大勢いらっしゃるのだろう。「小さな物語」の「語りの場」や、言葉に紡ぐための「出会いの場」をどのようにして設けていくか？ そしてまた、具体的なメディア（媒体）やチャンネル（回路）をどうすれば築いていけるだろう？ 今年度で本



プロジェクトにひと区切りをつけることになった現在、これらの問いに対する答えが私たちに求められている。

3. 小野トメヨさんと村上美保子さん

30日午後、新地町の新地駅前にある観海ホールの会議室で、新地語ってみっ会5名、みやぎ民話の会3名、そして私たちのプロジェクト参加者11名が一堂に会して、小野トメヨさんの語りと村上美保子さんの紙芝居上演を聴かせていただいた。



トメヨさんは数日前に101歳の誕生日を迎えたばかりだった。今回の集いを企画して下さったみやぎ民話の会の島津信子さんがこの日のために作った「トメヨさんのマーチ」（「アンパンマンのマーチ」の替え歌）を、会の最後に全員で歌い、誕生日をお祝いした。「そうだ うれしいんだ いきる よろこび きょうもトメヨさんは かたるんだ♪」

この日、トメヨさんは、あんこ餅が好物のカザン和尚にまつわる新地町小川地区の伝説「あんこ地蔵」、地元雷神様に奉納する闘牛（牛相撲）に関わる伝説「たっちゃん（達谷）のベコ」、狐に化かされる世間話「魚売りとサヨリ」、以上3つの民話と、トメヨさんご自身の3・11罹災体験について語られた。

トメヨさんの語り口の特徴は、力強さ、小気味よさ、大らかさにある。骨太のタッチで描かれたデッサン画がイメージされる。それは、聴く者に生きる力や元気を与えてくれる語りとも形容できる。

自分が子どもの頃に家族や身近な存在から繰り返し聴いたことがきっかけとなって語りの活動をするようになった「伝承の語り手」の場合、自分の語り口にモデルを持つことが多いが、70歳を過ぎてから資料集を読んで覚えていったトメヨさんの場合には、特定のモデルはなく、ご自身の個性や人間性が全面的に表れている。

罹災体験についての語りも、津波でめくりあげられた線路がハシゴのように何脚も散乱していた様子など、緊迫感に満ちた場面を、身ぶり手ぶりを交えてダイナミックに表現された。民話の語りの場合と同様、力強さと小気味よさがここにもあり、聞き手の想像力を喚起させる「語りの力」を実感した。

本当は80年前までの戦争体験についてもお聞きしたかったのだが、時間の制約もあり叶わなかった。また次の機会をきっと持ちたいと考えている。

美保子さんは大震災のため廃業を余儀なくされた創業以来 130 年の老舗旅館「朝日館」の女将だった。この日、彼女自身の発災からの 7 日間の体験を時系列に紹介した紙芝居『朝日館女将の 7 days』を上演された。

美保子さんの著書『福島県の北の端・新地町 小さな旅館の女将の東日本大震災体験記 見上げれば青い空』（イー・ペックス 2023）によれば、2012 年春、広島市民が立ち上げた「東北街物語紙芝居化 100 本プロジェクト」からの呼びかけがこの作品が生まれるきっかけだった。「長年、放射能に苦しめられてきた広島市民が、現在、放射能で苦しんでいる福島県の皆さんに何か応援できることはないかと考えました。そして原発事故で故郷に住むことができない皆さんに、故郷に伝わる民話の紙芝居をお届けすることにしました」としたためた手紙と一緒に、新地町に伝わる昔話「鹿狼山の仙人」の紙芝居作品が届いた。それから 2、3 年の間に



福島県内各地に届いた紙芝居は 70 本を超え、「さらにもっと送りたいから昔話を教えてほしい」という手紙も届き、被災体験を紙芝居にしたらどうだろうかと思いついて、広島の方々と相談して震災の紙芝居を作ることになった。他の市町村からも続々と依頼が届き、5 年の間に 70~80 本の震災紙芝居が出来上がったという (pp.168-169)。その一つがこの日の作品『朝日館女将の 7 days』だった。

私たち聴き手（観客）は、紙芝居の静止した画像を、演じ手の美保子さんの声や身ぶり手ぶり、そして沈黙と静寂に導かれて、自身の脳裏で動画映像に変換させ、自らその世界の中へ入り込んでいった。そして、演じ手の美保子さんご自身の体験談であることから、物語世界へ惹き付ける力はいや増すことになり、その圧倒的なリアリティに聴き手は打ちのめされた。紙芝居には、素話（すばなし）のストーリーテリングとはまた別の、独特の豊かな物語体験となることが改めて実感された。実際の被災体験を持たない人が「語り-継ぐ」ための有効なメディア（媒体・道具）として紙芝居があることを再認識することができた。



おわりに

東北へ発つ 5 日前の 8 月 23 日、立命館大学土曜講座で無言館共同館主・窪島誠一郎さんの講演をオンラインで視聴した。戦争体験を語り継ぐための方法として絵画という芸術作品があることを示した窪島さんのお話はとても興味深いものだったが、特に印象に残った

のが、講演後の質疑応答である。ある学生が、「語り継ぐことの大切さはよく理解できたが、自分は戦争体験を持たず、当事者の方に比べると、圧倒的に語り継ぐ力を持ち得ないと思ってしまう。どうすればいいだろうか」と尋ねた。これに対する窪島さんは次のように回答された。「イチローのレーザービームのようにダイレクトでいっぺんに届けようと思っても、とても真似はできません。自分の力で届くところにいる相手に向かって力一杯送球することしかできないのです。でも、受け取った中継者は次の中継者に力一杯送球する。そしてまた次へと力一杯。それぞれが次の中継者へと力一杯に届けようとすることで語り継ぐことが続けられていけば、それでいいんじゃないでしょうか」。

そして、力一杯に送球する方法、語り継ぐためのメディアは、自分なりに工夫して見つけ出したらいいとも言われた。窪島さんの場合には戦没学生の絵画作品を保存し展示するという方法だが、他にもいろいろな可能性があるというわけだ。今回のフィールドワークの中で出会った方言えば、和子さんのように、歌にすることで継承しやすくなることは、戦時中の子どもの替え歌からも、あるいは世界各地のスラム街で歌われる社会的メッセージを刻んだヒップホップからもよく分かる。久子さんや真由子さん、そしてトメヨさんのように声と身ぶり手ぶりだけで語るという「素話（すばなし）」の方法（メディア）も、聴き手の心や身体へと真っ直ぐにメッセージを届けることができる。

一方、美保子さんが用いた紙芝居は、絵画、絵本、コミックといった視覚的なメディアの一つであると同時に、演じ手の表現力（演技力）も求められる演劇的なメディアでもある。さらに、詩や小説やエッセイやルポルタージュなどの文芸的なメディアもまた重要な担い手だと思われる。私自身、美保子さんが書かれたエッセイ『見上げれば青い空』を読んで始めて、他のメディアではなかなか分け入ることのできない体験者の内的世界、感情の機微、心の襞（ひだ）といったものを垣間見ることができた気がする。

「いのちのバトン」を手渡す方法にはさまざまな可能性があり、自分にとって一番使いやすいメディアを選べばいい。そう考えることで少し気持ちが軽くなるだろう。ここで、村山（2016）³に提示された「経験した主体と想起する主体」（p.47）という概念を援用して、このレポートの論点をまとめておく。たとえ自分が当事者ではなく「経験した主体」にはなれないとしても、聴き手（享受者）として触発されて「想起する主体」になることはできる。そしてまた、非当事者ではあっても「想起する主体」として、語り手（供与者）となって、自分らしいメディアを用いて、目の前の聴き手（享受者）に向けて力一杯、自分が受け取った「いのちのバトン」を手渡そうとする。そうした営みが積み重なっていくことで「想起する主体」の環が広がっていく。それでいいんだ、と教えられた今回のフィールドワークだった。最後に、今回、歌や語りや上演を披露して下さった5名の皆様、これらの集いに参加下さった皆様、そしてその企画運営にご尽力下さった皆様に心からお礼申し上げます。

³ 村山絵美（2016）「戦争の記憶と語りの共同性：『経験した主体』と『想起する主体』」、大阪大学大学院文学研究科日本学研究室『日本学報』第35号、47-62 pp.

2025年度 東日本・家族応援プロジェクト活動報告 実践人間科学領域 M1 高坂めぐみ

はじめに

8/28～9/1までの4泊5日間で経験したこと、感じたこと、考えたことなどを中心に報告させていただきます。まずは、現地で私たちを温かく出迎えてくださった方々に心より感謝申し上げます。

1日目

アウシュビッツ平和博物館（白河）

白河に到着後、アウシュビッツ平和博物館に向かいました。入館してからは館長さんが原子力発電のこと、現在の福島についての話をしてくださいました。自身は福島県出身ではないそうですが、自分の信念のもと白河の地で平和博物館の館長をしておられることや、原発反対活動を続けておられることなどから、強いエネルギーを感じられました。震災から14年経った今でも、自分の子どもを産んでいいのかと悩む20代の女性もいるそうです。原発事故は、自分と同じ世代の女性が、子孫を残すことを戸惑うほどの影響を残してしまうのかと突きつけられました。加えて、原発の誘致・原発事故の発生・原発事故後の町の復興とされているものは、歴史の流れや県民性も関わる連続的で複雑なものであることを学びました。この気づきから、これから始まるプロジェクトにおいて、福島県の人々と関わる中で歴史や県民性は見られるのかどうかしっかりと観察しようと意気込むことができました。

交流会（白河）

交流会では、NPO 白河市民おひさま広場活動支援会の小磯さん、樋口さんの紹介のもと、渡辺さん、永岡さんのお話を聞くことができました。渡辺さんは当時、看護助手として働いていたそうです。一人で暮らしていた父を他の人には頼めないということで、病院を離れなければならなかった時を思い出して、涙しておられました。父を放って置けないという気持ちと、病院に残りたいという気持ちの葛藤で、本当に心に残っていることなのだろうと伝わってきました。震災からその後、お父さんは自分の家が、太陽光のソーラーパネルに変わり、鍵がないとその土地に踏み入れることができなくなったところを見てから、食事をするをやめ、数日後に亡くなられたそうです。婿養子できた家を守らなければならないという使命など、家への想いが人一倍強いお父さんであったのでしょうか。渡辺さんのお父さんは放射能や、ソーラーパネルの設置を計画した組織から、全てを奪い取られたのです。それが、町全体に起こっているということを知られました。

2人目の永岡さんは、当時18歳で高校の卒業式を控えていました。原子力発電が事故をしたことで、幼児期にはだしのゲンを見ていたこともあって恐怖の日々を過ごしていたそ

うです。永岡さんの話からは、ふるさとに帰ることができない、全く新しい町になることがどれだけ辛いことかを感じさせられました。私たちに、「自分の故郷に帰られなくなることを想像してみてください」と伝えてくださいました。その日は自分の家族や友達などを思い出し、今の日々がどれだけかけがえのないものなのかを噛み締めました。

2日目

東日本・家族応援プロジェクト+in 白河

鵜野先生と小磯さんのもと、手遊び、わらべ唄などの遊びを白河の地元の方々と行いました。年齢層は高齢の方が多かったが、2,3名ほどお子さんを連れてこられた方もいました。年齢が違っても関わらず、いつもの日常では体験することのできないことができました。最後は一つの輪になってお手玉をして、一体感を感じることができました。その後は団先生の漫画トークが行われました。家族の話からは、常に何かは起こり、それに対するリアクションが起こること、その連続が暮らしであるということ学びました。一方向の事実から偏見や差別などで考えるのではなく、さまざまな方向から事実を見ることで違う捉え方もできるということを教えてくださいました。

あちやんからおじいさん、おばあさんまで！
みんなで楽しもう！

東日本・家族応援プロジェクト(が)2025 in 白河

2025年8月29日(金)
白河市立図書館「りぷらん」会議室
10:00~12:30 (受付9:45より)

今年で最終となります。ぜひお越しください。

うたと遊びと漫画トーク

プロジェクト代表 村本 翔子 (立命館大学教授)

とぎ: 10:00 ご挨拶

とぎ: 10:05~10:45 わらべうたと伝承遊び
講師: 鵜野 祐介 (立命館大学教授)
小磯 厚子 (おひさまひろば副代表)

とぎ: 11:00~12:30 団士の漫画トーク
講師: 団 士郎 (立命館大学客員教授)

開催「水鏡の物語」に描かれたお話や、これまでの経験を通して出会った家族のことなど必要者本人が直接お話しします。たくさんのお話をぜひお聞きください。

白河市表郷公民館	7/07 (月) ~7/14 (月)
鶴岡市立図書館	7/15 (火) ~7/29 (火)
白河市東文化センター	8/01 (金) ~8/09 (土)
白河市立図書館	8/13 (水) ~8/30 (土)

共催: 立命館大学大学院人間科学研究科・NPO法人しらがわ市民活動支援会
詳しくは NPO法人しらがわ市民活動支援会 おひさまひろば 0248-27-2090

中鉢さんのお話 (福島市上松川)

福島市の上松川にある放課後児童クラブを訪れました。中鉢さんは特定非営利活動法人ビーンズふくしまで活動されておられる方です。お話では福島県全体の被災状況、避難して暮らす子どもの状況、お母さん同士のコミュニティであるままカフェの話などを教えてくださいました。ままカフェでは、震災から時間が経つにつれ、共有される話題も変わってきたそうです。震災当時から数年後は、放射線量の話や周りにどうみ

放課後児童クラブの教室



各地に設置されている放射能測定器



られるかという悩みを共有していたそうですが、現在はその話題が出ることは少なくなったという変化です。時間が経つに連れ共有しにくくなったのか、本当に悩みが消えたのかはわかりませんが、お母さん一人ひとりが抱える悩みはとても複雑であることが感じられました。また、お話では震災をきっかけとして根にあった問題が表面化したとおっしゃっていました。表面化していないから大丈夫なのではなく、平常時から支援していく必要があると考えました。

3日目

民話の会の方々との交流会（新地町）

101歳の小野トメヨさんに出会い、民話を聞かせていただきました。「あんこ地蔵」「たっちゃんのペコ」「鹿狼山と手長明神」の3つのお話を聞きました。臨場感のある力強い声から、記憶ではなく体に染み付いている民話を話してくださいました。伝承することで自分たちの祭りの起源や風土を知ることができ、故郷により誇りを持つような気がしました。震災当時の話では、「ほとんどの人が津波をこないと思っていたが、認識不足だった。人は信用しない。人は待たない」と伝えてくださいました。その後、新地語ってみっ会の村上さんから「あさひ館女将の7Days」という紙芝居を聞きました。この紙芝居は、同じように放射能の被害を受けた広島の方々が作成してくださったそうです。物語やお話からは、「津波てんでんこ」誰かを待つのではなく、みんなを信じてそれぞれが逃げるのが大事であることがわかりました。



おれたちの伝承館（小高）

おれたちの伝承館の展示の中で印象に残ったのは牛が食べていた柱です。避難することを余儀なくされた飼主さんが、自分を戒めるために持っているという写真でした。その写真には柱が削れており、誰かが食べているのがわかります。飼主さんの罪ではないのに、自分を責め続けているのだろうという推測からやるせなさを感じまし



た。さらに、甲状腺がんで手術を受けた20代女性の会見文には衝撃を受けました。「原発前からあったがんである」と医師に説明を受けてから、その言葉を信じ続けていた彼女は、自分の病気について調べた時に会った裁判の内容を見て、新しい事実を知ったといっています。彼女が触れていたこれまでの情報は行政や企業側の説明であり、甲状腺がんは希少ながんであること、原発事故後に甲状腺がんが見つかった子どもが多くいることなどの隠された事実があったのです。行政と企業の立場が、医療的説明にも影響を及ぼしている状況は許せないもので、自分の生きている日本でそのようなことが起こっていることを信じたくありませんでした。下記にURLを貼付したため、ぜひ読んでいただきたいです。

【甲状腺がん裁判追加提訴全文 <https://www.ourplanet-tv.org/50989/>】

展示の観覧後、中筋さんがいくつかのパノラマ写真を見せてくださいました。「時代をも凍結してしまう原発」であることが表されている写真でした。右写真のスーパーの雑誌コーナーには、今は見られない雑誌が置いてあります。



沿岸部のフィールドワークでは、時間がどのように止まっているのか、物理的なことも含めて観察したいと意気込みました。中筋さんからは、「地球、世界が発展することは果たしてプラスになるのか、どう影響するのかは開発している本人にも、誰にもわからない。どうなっていくのか。考え続けることが大事」というお言葉をいただきました。AIの発達により、思考力をも奪われそうになっている今だからこそ、変化や発展について考える姿勢は忘れないようにしようと思いました。

多賀城の丸山さんのお話

小高の双葉屋旅館で、多賀城の丸山さんのお話を聞きました。丸山さんは当時市役所の職員として、避難所の整備を1ヶ月ほど行っていたそうです。被災者には高齢者、乳幼児、妊婦、ペット、感染症者など様々な属性を持った人がいます。少数派と考えられる人々を、丸山さんは誰一人残さず、避難所の対応にあたっていたことが印象的でした。その人々に配慮しなければという気持ちよりも、スペースを作るのが当然であるということをも前提に動かれたように感じました。災害対策本部からの指示はなかったようで、ここでもやはり自分たちで考える力が大事であることに気づかされました。避難所のお話の後、報告書で何度か読んだことがあった「奇跡の紙芝居」も拝見しました。津波で流された車のトランクの中に、奇跡的に残っていた紙芝居は、巡りに巡って再び手元に戻ってきたそうです。丸山さんが10年以上かけて作った「パンダはなぜ可愛いのか！」という紙芝居

は、丸山さんの動物愛に溢れていました。

4 日目

沿岸部視察ツアー

朝早くから目に入ったのは、町があったとは思えない光景でした。家や建物が取り壊されているからこそ、そこに残っているものや新たに建てられているものが目に入りました。ツアーでは、福島県のイノベーションコースト構想の象徴である、ロボットテストフィールドや AI の開発施設などが目立っていました。故郷がなくなったこと、町の名前も言えないことなど、多くのことに辛さを感じている人がたくさんいるのに、それを無視してイノベ構想を明るい未来だと考えていることはどれだけ町の人々を苦しませれば済むのかと怒りの気持ちさえ込み上げてきました。その後、車から降りて海岸段丘を見ました。段丘を崩して、浪江町に原発を建設予定だったそうです。震災で計画が白紙になったことで防がれましたが、原発の建設にはそれぞれの立場の人の思惑と、その土地の風土が絡み合ったものなのだと感じました。事故のあった福島第一原発の近くに来ると、中間貯蔵施設の大量の汚染土などが緑のシートに覆われているのが見えてきました。その周りは、丘のように土手を作って木で覆われており、見えづらかったです。これは最初からではなく、年々そうになっているようで、福島イノベーションコースト構想の裏側が見られ、まさに光と影の部分を見ました。

開発施設



海岸段丘



中間貯蔵施設周りの丘や木々



木幡さん宅（大熊町）

大熊町の町議会議員でいらっしゃる木幡さんのお宅を訪問しました。帰還困難区域にあり、入るためには防護服を着なければなりません。防護服を着て向かった先は、2011年3月11日のままでした。木幡さんのご自宅は本家や納屋や、田舎の名家を思い出させるほど立派なものでした。その家が、動物だけでなく泥棒にも狙われた結果、足の踏み場がな

いほどに荒らされていました。その中で何よりも悲しかったのは泥棒の存在です。避難を余儀なくされた人々がいる一方で、まだなお自分たちの利益のために奔走する人間がいることです。この事実はきっと社会が生み出したようにも思いました。

その後、駅前の道路で中筋さんのパノラマ写真を見ました。パノラマ写真では商店街が並んでいました。写真の奥に自分が実際に見ている光景は、写真内の商店街があった実際の場所でした。商店は跡形もなく、草が天に向かって覆い茂っていました。商店街を見ながら木幡さんが懐かしそうに各家庭のことを話されているのが印象的でした。



伝承館・請戸小学校（双葉町）

伝承館では、震災後の今見ると思いが湧いてくる展示物がいくつもありました。1つ目は震災前の小学6年生の作文です。『体験学習でまなんだこと』というタイトルで、「原子力発電所ができたことによって、貧しい生活から豊かな生活へ地域が変わってきた。新しくきれいな施設ができて、私たちがそれを利用できていることがわかりました」と書かれていました。この体験学習でも説明されたであろう安全性は保証されず、震災によって事故が起き、その結果、町は更地になり昔の姿はない。原子力発電が持つ危険性を過小評価することは決してならないことだと思いました。もう1つは、外に展示されてあった、「原子力明るい未来のエネルギー」という看板です。町に設置されてあった当初は、本当に明るい未来を信じて標語が作られたように感じました。しかし、原子力発電がもたらしたのは明るい未来だったのでしょくか。暗く、重い未来だとは言いたくありませんが、放射能はそれを余儀なくするほど影響があるように感じました。



請戸小学校では、津波の被害の痕跡が生々しく残っていました。天井の杭が剥き出しになるまで天井を引き剥がした津波の恐ろしさを感じました。一緒に見学した丸山さんが、「津波は向かってくる時も大きな力があるが、引く時も力がある。引くときにさらに被害がある」と教えてくださいました。あんなに穏やかに見える海が、一瞬で建物を破壊することが信じられないくらいでした。2階からは、新しく建設予定の多目的広場と称した大規模なゴルフ場が見えました。帰還困難区域のそばで、復興という名目で作られている新たな施設はどういう意味を持つのだろうかと考えさせられました。そして、新しいものを作ることが復興なのでしょう。中間貯蔵施設にある汚染土や、原発にあるデブリや処理水の行方など、福島には直面している課題が多くあるように思います。考えなければなら

ない問題から目を背けているようで、残念な気持ちになりました。

小学校の教室内



2階から見える建設現場



5日目

ソーラーパネル SAKURA (富岡町)

360度ソーラーパネルと山しか見えない光景が異世界のように感じました。そのソーラーパネルは11万枚にも及びます。しかし、驚いたことに現在は需要と供給を合わせるために供給を止めるよう要請されることが多くなったそうです。供給を止めることが増えたのなら、なぜ、多くの人の田んぼを借りてまでソーラーパネルを作ったのか疑問でした。そこに、「復興」を表そうとする思惑もあっただろうと思いました。さらに、契約終了後の計画はまだなされていないそうです。契約終了の3年前から計画を始めるということで、さらなる問題が生まれそうな予感がします。実際に、相続で揉めている地主の家もあり、建設当時とは状況が変わってくるでしょう。



伝言館訪問 (檜葉町)



丹治さんのご説明のもと、伝言館内を見学させていただきました。丹治さんのお話からは、国や企業の放射能に対する見解が見えてきました。例えば、通常、1時間に0.23マイクロシーベルト以上は超えてはいけないと世界的に決まっているにも関わらず、福島県民は20倍、原発作業員は50倍の数値の被ばくを容認させられています。福島県では低線量長期被ばくの問題が健康被害となっているにも関わらず、容認させられているという事実があります。もう一つの例は、処理水の放出についてです。デブリを冷やした汚染水は、トリチウム以外の物質

は取り出したとされています。世界を流れている海に流すことは日本だけで済まされる話ではありません。十分な議論と証拠はあるのか、国や企業に問いたい気持ちが湧き上がってきました。

考証館訪問（いわき市）

考証館では、事故当時の新聞や原発事故関連の本、また津波で亡くなった方の制服などが展示されていました。新聞は、朝日や読売などさまざまな新聞社のものが置かれており、報道の仕方にそれぞれ違いがあるようで興味深かったです。津波で亡くなった方のお話は心に残りました。その方は、津波で流されてしまい捜索活動がなされていたが、原発事故により捜索が打ち切れ、長年遺体も見つからない状況だったそうです。遺体を探すことすらできなかったことは遺族にとって辛すぎる事実だと思いました。



5日間を通して考えたこと

区域について

沿岸部では、帰還困難区域、特定復興再生拠点区域、避難指示解除区域などに分かれています。しかし、実際に行ってみるとその安全性はどうか担保されているのかが不思議でした。特定復興再生拠点区域の道から一本外れた道に入ると、14年前の景色のままであったり、時間によって制限がかけられていたりしました。当然、動物たちは人間が考えた区域など知らずに行き来していることでしょう。それを考えての復興再生拠点区域なのか、疑問に思いました。双葉町の伝承館に行くための復興ロードを見ると、「復興」という言葉の意味がわからなくなる上に、人間が作った「区域」は思惑が絡み合ったものであるということを知りました。

差別、分断の怖さ

5日間いろいろな方に話を聞いていると、福島の子力発電の問題は「分断」を生み出し続けていることがわかりました。まずは、建設時の「分断」です。伝言館の丹治さんから、建設反対の家は、賛成の看板を貼っていないからと白い目で見られる状況が生まれていたという話を聞きました。行政や企業は賛成派と反対派の分断を生み、分断によって建設を進めたということがわかります。次に、原発事故後の賠償金問題です。1日目の被災されたお二方から話をうかがいました。浜通り出身であると他の地域の人に伝えると「お金をもらっていいな」と心無いことを言われることもあるそうです。本当は、怒りの矛先は自分たち同士ではないはずなのに、区域ごとの賠償金によって分断が生まれてしまいました。5日間を通して、SNSやニュースなどのマスメディアだけでなく、実際に目で見て考えることは、さまざまな視点からの考えができるということを知りました。

2025年度 東日本・家族応援プロジェクト活動報告 臨床心理学領域 M1 杉本峰香

はじめに

今年の夏は、例年にも増して厳しい暑さに見舞われました。その中で私たちは、東日本大震災と原発事故に関する現地調査・交流を行い、被災と復興の証人になることを目指し、「東日本・家族応援プロジェクト」に参加しました。期間は8月28日から9月1日までの5日間。福島県各地を訪ね、津波や原発事故で被災された方々、支援者の方々、そして震災を次の世代に伝える語り部や施設の職員の方など、様々な立場の方と出会い、お話を伺う機会をいただきました。

それぞれの声から、震災と原発事故が今も人々の暮らしや心に影を落としていることを実感しました。今回このような機会をいただき、実際に現地に赴いて街並みや風景を目にしたり、地元の方や支援者の方のお話を直接聞くことで、映像や資料だけではわからないことも学び、考えることができたように思います。

酷暑の中にもかかわらず、私たちを温かく迎え入れ、お話を聞かせてくださった皆さまに、心より感謝申し上げます。この学びを忘れず、今後活かしていきたいと思えます。

福島県における震災関連の課題

この文章を読んでくださっている貴方は、東日本大震災の現状についてどのようなイメージを持っていますでしょうか。もしかしたら、東北は復興したと考えていらっしゃる方もいるかもしれません。私自身も今回のプロジェクトに参加するまでは、震災が残した課題について見えていない部分ばかりでした。しかしながら、福島県では今もなお、人々の暮らしや心への影響が続いています。現地を訪れ、実際にお話を伺ったり、視察する中で見えてきた課題を、ここにご紹介します。

1. 「あいまいな喪失」

原発事故がもたらした心理的苦痛の大きな要因の一つとして、「帰れる場所は存在しているのに、帰ることができない」という状況があります。原発付近に住まわれていた方は、自分の家や街は存在しているのに、放射能汚染のために何年も戻ることができない状況でした。また、現在では大部分の建物が取り壊され、震災前とは全く異なる形で開発されています。何年も抑うつ状態が続いていたという富岡町から避難されてきた方は「『あいまいな喪失』という言葉を知ってから、つらさの訳が分かり、楽になった」と話してくださいました。この方のお父様も、亡くなる数日前、もう戻れなくなった故郷の海を見て泣いていらしたそうです。家や土地が消滅したわけではなく、そこにあるのに近づけない。あるいは元の故郷とは全く



大熊町の今と昔

異なる形で「復興」する。このねじれた現実が、人々の心を長く苦しめ続けています。大熊町出身の方からは、「自分の故郷が同じ状況になったらどう思うか、想像してみしてほしい」とのお言葉をいただきました。他方では、原発事故が起きたために、津波等による行方不明者の捜索もままならないという事実もありました。地震と津波に加え、原発事故による被災が、より複雑な心理的問題を生んでいることを学びました。

2. コミュニティの分断と孤立

震災後の避難先では、「よそ者扱いされた」「賠償金問題をきっかけに心無い言葉を投げかけられた」という経験をされた方が少なくありません。そのために、原発事故で移住した方は出身を伏せていることが大半だとも伺いました。原発事故で避難されてきた方の過酷な経験や、故郷に戻れない苦しみをお聞かせいただいた後の話だったので、言葉の刃をむける人がいるという状況に私自身衝撃を受けました。その方が口にした「人間、経験したことしかわからないんですよ」という諦めにも似た言葉は、積み重なった痛みの大きさを物語っているようでした。また、原発によって地域に対立が生じるような状況は、原発建設時からあったそうです。例えば、小さな田舎町の事例では、関係機関が原発に賛成している人の家のはっきりわかるようにし、反対派に同調圧力がかかるような方法をとっていたと伺いました。また、福島の発展を願う人々の気持ちが利用されるような側面もありました。原発は新たな雇用を生み出すことばかりが強調され、危険性は説明されない「原発安全神話」のもとに建設されました。ここから、国と地方の権力関係のもと、その土地に住む人たちが対立し、分断されてしまったことがわかるかと思います。

3. 子どもと家族への影響

原発事故による避難生活は、多くの子どもや家族の心に深い影響を及ぼしました。NPO法人ビーンズ福島の中鉢さんによると、度重なる避難生活によって、子どもたちは転校や交友関係の断絶を強いられたり、親の失業や同居家族の分断を経験してきたとのこと。中鉢さんたちはこのような状況に対して予防的介入を図るため、狭い仮設住宅から子どもたちを解放し、広い教室で学習や遊びを通じて友達と過ごせる場を提供してきました。さらに「ままカフェ」という母親同士の交流の場では、子育てに関する話題はもちろん放射線に関する心配事を話すことができたそうです。現在の活動は、直接的な被災者支援の側面はかなり小さくなってきているといいますが、「不登校や引きこもりといった問題の背景には震災があったりと、震災の影響が今も残っている」という言葉が印象的でした。

4. 「復興」と産業

福島では「復興」という名のもとに大規模な開発が進められています。例えば富岡町には、2017年から稼働しているという11万枚のパネルを有するメガソーラー発電所があります。職員の方曰く、稼働開始後から20年の計画しかなく、その後施設や土地がどのようなのかは全くわからないということです。他の問題として



富岡町のメガソーラー

は、施設周辺は震災後、人が住めるような環境ではなくなってしまったために、職員の方達は 100 キロほども運転して通勤していたり、家族と離れて暮らすことでお酒の問題に陥ってしまうこともあるそうです。また、イノベーションコースト構想工業地帯の見学を行った際は、元々あったような商店の街並みや農業の復興はおざなりになり、殺風景な場所に大きくて綺麗な施設が並び、新しい技術の開発に注力しているような印象を受けました。

大熊町ではかつて、原発の温排水を利用してヒラメの養殖が行われていました。「この事実を知っている人はこちらで養殖されたヒラメを食べるのを敬遠していた」という地元の方のお話から、原発問題が福島産業にどのように入り込んでいたかが窺い知れます。現在においても、新しい科学技術や産業の光の側面だけ見せてしまうことは、福島原発ができた時と全く同じことをしているように感じました。都合のいい「開発」ではなく、本質的な「復興」がなされることを祈るばかりです。

5. 政策・制度の課題

震災当時、宮城県で避難所の運営を支えた職員の方からは「避難所の運営に関する上からの指示が全くなかった」と伺いました。ご自身も津波で住居を失いながら、睡眠時間を削って支援にあたったというお話から、被災者であり支援者である職員の苦悩を知ることができます。これを教訓に、避難所運営等に関するマニュアルやノウハウを記録し、活用できるような体制が必要だと感じました。

また、大熊町の間蔵貯蔵施設を見た際には、フレコンバッグに緑のシートが掛けられ、草木が生い茂ることでどこか隠されているように感じました。これらが最終処分場に移動される時期や量はまだ明確になっていません。このように、汚染物質の処理や管理の見通しがなくまま原発が稼働していたという事実は、今も重くのしかかっています。安全よりも利害が優先される構造は、地域住民の方に強い不信感を残しています。

おわりに

5 日間のプロジェクトに参加し、様々な方から聞かせていただいたお話、目にした風景から、私が感じた課題は以上になります。福島における震災は過去の出来事ではなく、今も続く現実なのだ実感しました。来年、チェルノブイリ原発事故から 40 年、福島第一原発事故から 15 年の節目を迎えようとしています。福島での体験を通して、私たちは東日本大震災や原発事故について、「終わったこと」として忘れるのではなく「今も続いていること」として意識し続ける必要があると思いました。私自身の課題としてはまず、今回学んだことをこれからどのように活かすことができるか、考えていきたいと思っています。



双葉町の防波堤からみえる景色

2025 年度 東日本・家族応援プロジェクト 活動報告
実践人間科学領域 M1 中村旭

1 日目

NPO 法人アウシュビッツ平和博物館(自主学習)

アウシュビッツ平和博物館では、館長の方が震災や復興について率直に語ってくださった。行政の復興政策には賛同できない部分も多く、住民との間に隔たりがあるという。街づくりに希望を見いだす人もいる一方で、経済的に余裕ができると離れていく人も多く、知らない街ができていく感覚に疑問を抱く声もあると語られた。また、結婚や出産への不安、地域に残ることへの葛藤、さらには戊辰戦争の影響も含めた福島の人々の気質にも触れられた。一方で、裁判に関わる若い世代の参入に希望を見出していることや、県内に多様な意見が存在すること、さらに館長自身が福島出身ではないため追いつけない部分があることも率直に語られていた。ビデオ映像では、アウシュビッツで証拠を隠そうとした事実を学び、震災における「人災」の側面を覆い隠すことの危うさを重ね合わせた。真実を正しく伝えることの重要性を改めて考えさせられた。



マイタウン白河

NPO 法人しらかわ市民活動支援会「おひさまひろば」副代表の小磯さんを通じ、渡辺さんと永岡さんから震災当時の体験を伺った。

渡辺さんは、震災当時富岡町で看護助手をしており、病院での強い揺れや津波の光景、限られた備蓄の中で冷静に過ごす患者たちの姿を語った。家族を守るため患者のもとを離れざるを得なかった苦悩や、「曖昧な喪失」という故郷への複雑な思いを涙ながらに伝えられた。

永岡さんは、当時 18 歳で大熊町に住んでおり、原発からわずか 3 キロの自宅で被災した。余震と放射能の恐怖の中、屋外に出られずに過ごした体験や、避難所を後にせざるを得なかった後ろめたさを振り返り、「もう二度と帰れないかもしれない」という故郷に対する当時

の感覚を共有してくださった。

お二人の語りからは、過酷な状況においても他者を思いやる強さと、人と人とのつながりの温かさが感じられた。語りたくない記憶をあえて私たちに託してくださった意味を考え、証人として何を受け継ぐべきかを今後も問い続けたい。また、このような話を聞くことが出来たのは、長年のプロジェクトを通じた信頼関係の積み重ねによって得られたものであるため、関わってきた先生方や先輩方への感謝を感じた。



2 日目

東日本・家族応援プロジェクト+in 白河

白河市立図書館にて東日本・家族応援プロジェクト+in 白河「うたと遊びと漫画トーク」を行った。

「わらべうたと伝承遊び」では、みんなで歌いながら手を動かしても和やかな雰囲気であった。手遊びの「いちののさんにのしのご」は私にとって最難関であったが、数え方を英語、中国語に変えながらも楽しく進められた。お手玉を使った遊びでは、みんなで輪になって遊ぶ際、参加していたお父さんと抱えられたお子さんの隣になり、微笑ましい時間を過ごすことができた。途中、小さな女の子がお母さんの元を離れて歩き回り、私の近くでペットボトルを使って楽しそうに遊んでいた。お母さんが安心して子どもを自由にしておける空間はとても温かいと思った。

「団先生の漫画トーク」では2つのエピソードが紹介された。1つ目は「テキトー」で、離婚後も同じ地域に住み続けることで、兄弟や再婚相手の子どもが同じクラスになることもあり、前妻の家庭に子どもを預けることさえあるという話だった。私は意見交流で一緒になった60代くらいの女性お二人に対し「子どもなら嫌だと思う」と率直に伝えたが、そのお二人からは「親としては理想」との意見が返ってきた。子どもの複雑な気持ちを理解しつつも、助け合える環境の大切さを考え直す機会となった。2つ目は「いるかいないか」で、普段あまり存在感のない父が一週間行方不明になり、その間家族が大きな喪失感を抱き、帰宅後には絆が深まったという話である。交流では「突然すぎて共感できない」という意見もあったが、私は自分の家庭に似た部分があり共感を覚えた。失踪の理由や絆が深まった背景

について意見を交わす中で、感じ方は立場や年齢によって異なることを改めて実感した。意見交流の最後に女性たちから「どこから来たの?」と親しげに声をかけていただき、帰り際には「元気でね」と温かい言葉をもらった。さっき会ったばかりの私にそのように声をかけてくださることに胸がいっぱいになった。世代を超えて笑い合える空間は大きな幸福感に満ちており、だからこそこのプロジェクトが今年で終わってしまうことに強い名残惜しさを感じた。



放課後児童クラブみんなの家 中鉢さんからお話

特定非営利活動法人ビーンズふくしまで「みんなの家」の活動について中鉢さんからお話を伺った。ビーンズふくしまは1999年から子どもや若者が自分らしくつながれる社会を目指して活動しており、震災時には避難や転校、親の失業などで不安定な状況に置かれた子どもたちを支えるため、学習支援や保護者との関わりを早くから行ってきた。中期的には「ままカフェ」を通じて母親同士の交流や協力団体とのネットワークづくりを進め、地域のつながりを育んだ。今後の課題として、中鉢さんは支援の手が減少していることを挙げていた。私自身、学習前には被災地はほとんど復興したものと思い込んでいたが、支援を求める人が取りこぼされる危険があることを知り、その現状を多くの人が理解する必要があると感じた。

3 日目

交流会 小野トメヨさん、新地語ってみっ会、みやぎ民話の会

観海ホールで新地語ってみっ会、みやぎ民話の会の方々との交流会に参加した。私は事前授業で民話を調べていたこともあり、この会をとっても楽しみにしていた。中でも印象的だったのは101歳の小野トメヨさんによる語りである。普段の柔らかな語り口から一転、物語が始まると力強さを帯び、聴く者を民話の世界へ引き込むようだった。「あんこ地蔵」や「鹿狼山の手長明神」といった話には、人を思いやる心や信仰を大切にする姿勢が込められてお

り、単なる昔話ではなく地域の文化や価値観を今に伝えるものであると感じた。また、震災当時の体験談も伺った。津波が来ないと思われていた土地に実際に大きな津波が押し寄せ、多くの人が逃げ遅れたこと、そして「津波てんでんこ」という言葉が命を守る教えとして大切にされてきたことを知った。さらに、村上さんによる紙芝居「あさひ館女将の7Days」では、地震直後の混乱や避難所での再会の喜びが生々しく描かれ、自分もその場にいるかのように感じた。こうした語り継がれる物語や体験は、過去の出来事にとどまらず、これからを生きる私たちに向けられた大切なメッセージであると感じた。



おれたちの伝承館 中筋さんからの説明

おれたちの伝承館では、福島の人々が災害や原発事故をどう受け止め、未来へ伝えようとしているのかを感じ取った。展示は写真や絵画、葉の現物など多様な手法で構成され、言葉だけでは伝わらない現実を映し出していた。特に、鎖につながれ逃げられず餓死した牛を表現した展示は、人間だけでなく動物も犠牲となった事実に感じ、強く印象に残っている。また、被災や事故に関する手記からは報道に載らない個人の体験や苦しい決断が語られており、読んでいて胸が痛んだ。さらに、館長の中筋さんに見せていただいたスーパーや雑誌売り場の写真は、積もった埃や崩れた棚とともに日常が突然断ち切られた様子を生々しく伝えていた。ここでの展示は単なる被災の記録ではなく、これからどう生きていくのかという問いさえ示されていると感じた。また、学びを自分の中だけで終わらせず次世代へ伝えていく姿勢の重要性を考えさせられた。



丸山さんからのお話

丸山さんから、多賀城市で市役所職員として約 1 カ月避難所運営に携わった経験を伺った。体育館に区画を設けたり、ペット同伴者には教室を解放したりするなど、生活環境を工夫していた点が印象的だった。また、自らも被災者でありながら避難者と積極的に交流し、昼夜を問わず職務を果たしていた姿から強い責任感を感じた。一方で、自宅避難者が物資を受け取れないことや上からの指示が無かったことなど、災害対応の課題も示されていた。最後に見せていただいた紙芝居からは丸山さんの温かさも伝わり、避難所運営の実際を知る貴重な機会となった。



4 日目

沿岸部視察ツアー

中筋さんの案内で沿岸部視察ツアーを行った。車窓から見える景色は、雑草に覆われ、長い年月でそれが当たり前のように見えた。しかし、そこに確かに人々の暮らしがあったことを思うと言葉にならない思いになった。少し道を外れると帰還困難区域が広がり、立ち入ることが難しい現実も目の当たりにした。また、福島第一原発周辺では中間貯蔵施設に大量の汚染物質が積まれ、緑のシートで覆われ木々に囲まれていたが、これは年を追うごとに隠す形へと変わったという説明を受けた。復興の明るい面だけではなく、実際に訪れなければ見えない現実を知ることができた。



木幡さん宅訪問

CREVA 大熊で木幡さんと合流し、注意事項を伺った後、スクリーニング場で手続きを行った。防護服に着替えるだけでも多くの時間を要し、自宅に戻るといふ当たり前の行為が大きな負担となる現実を痛感した。木幡さんのご自宅は立派な造りが今も形として残っていたが、内部は野生動物や盗難の被害で荒れ果て、時計やカレンダーが震災の時刻を示したまま止まっていた。その光景は、日常が突然奪われたことを物語っており、胸が詰まる思いになった。さらに、かつて塾として使われていた離れについても伺い、地域に根付いた親の願いや若者の流出といった社会の複雑さを知った。訪問後には、ヒラメ養殖場として栄えた栽培漁業センターを案内していただき、地域の営みとそれが失われた寂しさを感じた。



東日本大震災原子力災害伝承館

東日本大震災原子力災害伝承館を見学し、原発事故が人々の生活や心に深く影響を与えたことを改めて感じた。展示からは、避けられなかった選択や苦しい体験が生々しく伝わり、復興には建物や設備だけでなく、地域に住む人々の生活や思いをどう取り戻していくかを考えていかなければならないと思った。

請戸小学校

浪江町の請戸小学校は震災遺構として被害がそのまま残されており、津波で押し流された教室や教材から被害の大きさが伝わってきた。全員が避難できたのは日頃の訓練と連携の成果だと感じた。一方で、隣接地に整備が進むゴルフ場については、誰のための復興なのか疑問も抱いた。その後訪れた大平山霊園は請戸小学校の生徒や職員が実際に避難した場所である。実際に歩くと相当な距離であることが想像され、当時の人々の苦労に思いを馳せた。失われた町並みを思うと胸が痛み、二度と同じ悲劇は繰り返してはならないと強く感じた。



5 日目

富岡町メガソーラー発電所見学 猪狩さんからの説明

富岡町メガソーラー発電所は、かつて田んぼが広がっていた土地に 11 万枚以上のソーラーパネルが整然と並ぶ光景が圧倒的で、人の暮らしが失われた場所に突然現れた巨大な設備の異様さを強く感じた。現地での説明を聞くと、発電された電気の多くは地元で使われるのではなく関東方面に送られ、需要と供給の調整が難しく、せっかく発電しても無駄になる電気もあるという現実があった。また、広大な設備を少人数で管理する職員の負担の大きさも印象的だった。再生可能エネルギーという言葉は環境に優しい前向きなイメージを与えるが、現場ではこうした課題や人々の努力があることを知り、理想だけでなく運用面にも目を向ける必要があると思った。

伝言館 丹治さんからお話

伝言館では、震災や原発事故の影響について改めて考えさせられた。丹治さんのお話や展示から、原発誘致の経緯や安全神話の形成、事故後の甚大な被害を学んだ。特に、国際基準を超える被ばくを受け入れさせられている住民や作業員の状況や、賠償や地域社会の分断などが印象に残った。また、原発建設段階から分断が利用されていたことも知り、震災から時間が経つ今だからこそ、事実を正しく語り継ぎ、エネルギー政策や未来の選択について考える必要性を強く感じた。



古滝屋内 考証館

古滝屋の中にある原子力災害考証間では、震災や原発事故にまつわる多くの展示があった。津波で子供を亡くした方の展示は特に印象に残った。原発事故の影響で捜索活動が打ち切られ、遺体を探すことすらできなかった事実は、言葉に出来ないほどの苦しみであると思う。展示されていた実際のお子さんの服やランドセルからは、深い悲しみとそれでも誰かにこの事実を伝えようとする強い思いや意志が伝わってきた。

6 日目(自主学習)

せんだいメディアテーク

せんだいメディアテークは、美しい外観の建物は平日の午前中にもかかわらず多くの人で賑わっていた。目的であった「民話声の図書館」では、トメヨさんの力強い語りで「オオカミの恩返し」と「おだんごころりん」を聞いた。どちらもユーモアを交えつつ教訓を伝える内容で、民話の持つ魅力や語りの力を改めて実感した。その後、東日本大震災の記録を残す「わすれん！資料室」を見学した。特に印象に残ったのは「3月12日はじまりのごはん」という展示で、震災当日や翌日に初めて口にした食事の写真と、それにまつわる思い出や感想が付箋に書かれて貼られていた。「具の入っていないカレーライスが1皿1000円で売られていた」「暗がりでの食事は美味しくなかった」など、当時の状況がリアルに伝わり、震災の現実を身近に感じる事ができた。この展示は、多くの人に知ってほしい大切な記録であり、過去の出来事を学びとして受け止め、忘れずに伝えることの重要性を改めて考えさせられた。

遊覧船 (松島海岸レストハウス～マリンゲート塩釜)

松島海岸レストハウスから15時発の遊覧船に乗り、マリンゲート塩釜へ向かった。私が

乗ったのは芭蕉コースで、松尾芭蕉が感動した景色を巡る約50分の船旅であった。蓋小島や鎧島などの島々を間近で眺めながら、アナウンスで震災により形が変わった島もあることを知った。当時の景色をそのまま見ることはできないが、自然の変化の一部として受け止めた。

塩竈市津波防災センター

より多くの土地を見たいと思いマリンゲート塩釜へ向かう船を選んだが、到着すると塩竈市津波防災センターが目に入った。中に入ると、震災当時沖にいた船員が津波を経験した映像が流れ、その迫力と恐ろしさをひしひしと感じた。施設職員の方からは、防潮堤を閉めに行った映像や、現在は開閉が自動になったことなどの説明を受けた。また、防災センターは避難所の役割も持ち、簡易トイレや食料が備蓄され、過去の地震でも避難者が利用したということを知った。偶然訪れた場所であったが、貴重な映像や説明を聞き、震災の教訓や対策の重要性を改めて実感出来た。

実習を通して

想像以上に大変なこともあったが、それ以上に深く心に残る出会いや学びに恵まれ、非常に充実した時間を過ごすことが出来た。特に、現地で震災の語りや記録、実際の風景や生活の跡に触れることで、震災や原発事故は過去の出来事ではなく、今も続く現実なのだ実感した。帰還困難区域には生活が戻らず荒れた家屋が残り、震災遺構として保存されている建物からは当時の緊迫感が伝わってきた。その光景や、被災者の方々の生の声、亡くなった方の遺品や記録資料に触れた経験は、ニュースを見ているだけでは得られない重みを持っており、現地に赴いたからこそ実感できた学びであった。また、地域の方々が震災の体験を語り継ぎながら、未来に向かって力強く歩む姿には心を打たれた。震災の記憶を風化させず、次世代に伝えていくことは私たちの役割であり、証人として果たせることであると思う。今回の経験は、単に震災や原発について学ぶだけでなく、自分自身がどのように向き合い、その学びを周囲に伝えていくかを考えるきっかけともなった。今後は、現地で得た気づきや考えを日々意識しながら、自分なりに伝えていける存在でありたいと思う。

謝辞

本実習では、先生方のご指導と現地の方々のご協力により、被災地の状況や震災の記録を深く学ぶことができました。心より感謝申し上げます。

東日本・家族応援プロジェクト+ 2025 活動報告 人間科学研究科 実践人間科学領域 M1 瀨美乃里

はじめに

福島県で過ごした4泊5日の実習は、出会いと学びの連続で、何度も心が動かされ、それを経て考えることを繰り返す日々でした。実習に行く前には知らなかった多くのことを、現地で様々な人と出会いまた見聞きする中で学ばせていただきました。そこで得た体験を少しでも伝えられるよう、活動内容を基に記していきます。

白河市での交流会

実習の初日は、マイタウン白河で交流会を行った。ここでは、当時看護師として働かれていた渡辺さんと、進学を控え春休みの日々を過ごされていた永岡さんのお二人にご自身の被災体験を語っていただいた。震災発生直後から避難に至るまで、またその後の避難生活についても丁寧に、そして鮮明に語ってくださった。自分は何も体験していないはずなのに、受け取った言葉から目の前にその情景が浮かぶようで、そこから感じたことが心に流れ込んできた。14年経った今でも当時のことを鮮明に語られる様子から、それだけ震災と原発事故による被災経験がもたらした影響の大きさを実感した。また、お二人が原発に近い地域に住んでおられたことから、故郷についての思いも語ってくださった。語りの中で、「今大切な帰りたい故郷はもうどうやっても戻ってこないし、復興を遂げたとされる新しい街の風景はもう自分にとっての故郷ではなくなってしまった」と話されていたことがとても印象に残った。原発事故により踏み入れることすら難しくなってしまった土地が、さらに新しく作り替わってしまうこと。加えて、県内でも格差や偏見が生まれてしまうこと。そのどれもが衝撃的で、ただただお話を受け取ることに必死になってしまった。そのような衝撃的だと感じられたお二人の経験を、自身が本当の意味で理解することができる日は来ないだろう。しかし、今回語っていただいたことを確かに経験した人がそこにいるのだと知れたことが、自分にとって何よりも大きな学びとなった。福島の被災における大きな問題に原発と放射能があることを再認識することができた。



東日本・家族応援プロジェクト+(プラス)2025in 白河 うたと遊びと漫画トークイベント

昨日お世話になった小磯さんをはじめおひさまひろばの方々と会場設営を行った後、わ

らべうたと伝承遊びが始まった。イベントには、小さなお子さんからシニアの方まで幅広い年齢の方が参加されていた。鶴野先生と小磯さんを中心にわらべうたやお手玉を使った遊びをする中で、どなたも笑顔で楽しまれていた様子が印象的だった。

団先生の講演では、自分の家族にも思いを巡らせながら家族というものについて考える時間となった。感想共有の時間を通して、参加されていた現地の方とお話させていただいた。それぞれが漫画に共感していたり気づきを得ていたりしたことを共有でき、多様な家族の捉え方を感じることができた。団先生の漫画は、誰しもにとって身近な家族というものが題材になっているからこそ、自分に置き換えながら考えることができそこから多様な考えを広げられた。



みんなの家での学び

福島市にある放課後児童クラブみんなの家にて、中鉢さんから福島の被災についてのお話を伺った。福島の被災について当時の実際の被害状況や原発事故による問題について、被災後の子どもたちの状況と実際に行われた支援について教えていただいた。福島の被災について、事前に調べた中で知っていたつもりだったが、改めて大変な状況だったことを認識した。原発事故による放射線の被害について、当時の天候に左右されながらも、広範囲に影響を及ぼしていたことを学んだ。今なお避難指示が出ている浜通り地域について、耳にする地名がわかる場所も増えてきたことで、実習を通して少しずつ自分の中で知識が積み重なり繋がっているような実感を得た。支援についてのお話では、被災当時の子どもたちの状況が深刻なものであり、ストレスの増加や問題行動の原因になっている一方で、行政が中々動かない部分でもあることを学んだ。大災害による混乱が生じていた直後から、できることを届けてこられた方のお話は、支援を求めている人が多くても行政では届けられない限界とそれでも必要な支援について考えることができた。

新地での交流会

新地では、新地語ってみつ会とみやぎ民話の会の方からお話を聞いた。先日 101 歳を迎えられたという小野トメヨさんからは、力強くいきいきとした民話の語りを聞かせていただいた。小野さんの、101 歳には見えないパワーを持った語られる様子がとても印象に残った。「あんこ地蔵」のお話からは、地域の人に今なお愛されているお地蔵さんとその地の風景が浮かぶようで、その地のつながりに心が温かくなった。一方で、震災当時のお話からは、

今後の災害に対して備えることの大切さをしっかりと伝えて下さった。

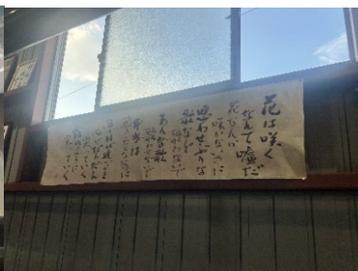
新地語ってみっ会の村上さんから、紙芝居を披露していただいた。村上さん自身が題材となった「朝日館 女将の7DAYS」は、地震の発生直後から避難し津波が到達するまでの様子がまじまじと紡がれており、はらはらとした焦りや恐怖について、紙芝居を通して想像させてくれるものだった。特に、避難所で家族が再会できた場面では、思わず涙ぐんでしまうほど心動かされた。震災当時のお話を語られる際、すらすらとまた詳細に言葉を紡いでおられたことが心に残っている。震災の記憶が14年経っても強い衝撃をもたらすものとなっていることをここでもまた改めて実感した。



←紙芝居

おれたちの伝承館

小高にあるおれたちの伝承館では、展示されていた作品それぞれから被災された人々や被災地を見てこられた方の心の叫びのようなものが感じられた。ここにあった資料から、原発が地元にも誘致される可能性があったことを知り、これまで学んできた原発問題がより身近なものに感じられ、その深刻さが一層身に染みるようになった。特に印象に残ったのが、「花は咲く」の歌に関する詩の作品だった。この詩を見て、震災後数年のうちに作られたこの曲を、当時小学生だった自身が合唱で歌った記憶がよみがえった。当時は、ただ合唱の曲として感動するものであり、テレビでも多様な著名人が歌う姿を目にした。しかし、この作品を見て、この曲がただ良いと思えていたことすらも幸せなことだったと考えさせられた。た、中筋さんに見せていただいたスーパーと雑誌の販売ラックの巻物の写真も印象的だった。当時のまま残された雑誌の表紙には知っているアイドルの古い記憶のままの姿が残されていた。被災した場面を切り取った写真はこれまでも見てきたが、見せていただいた巻物のように一連として見ることで、より一層現場の様子を体感できた。



丸山さんのお話

丸山さんからは、当時の避難所運営についてのお話を伺った。過酷な状況の中、それでも頑張ろうと動く丸山さんの誠意と正義を感じた。これまでお聞きしたお話の中では、避難所に役所の人なんかいなかったから自治しなければいけなかったと話す方ばかりな印象を受けていた。今回、行政の方の動きを聞いて、想定外のことばかりであったことや動かす人自身の人柄や手腕が問われること、そして何よりも支援者側も被災者であり休むことも大事だということを学んだ。冊子にまとめていただいた内容は、当時の学びを得るだけでなく、今後の災害にも備えられるような貴重な情報が詰まっていた。

大熊町での学び

大熊町では、木幡さんにお世話になり、防護服を着用し帰還困難区域にある木幡さんのお宅を訪問させていただいた。スクリーニング上で防護服に着替えた際、想像していたよりもはるかに軽装であったが、前後の申請や検査、毎回これに着替えて訪れることを想うと、我が家に帰るだけでもその手間をかけなければいけないことに対するむなしさが喚起された。木幡さんのお宅はとても立派で、地震が来たと思えないほどしっかりとそこに立っていた。しかし、たどり着くまでの道は茂みがうっそうとしており、中は到底住める状態ではないほど荒れ果てていた。家の中は、動物や盗人などに荒らされた結果そうなっていると教えていただいた。部屋の中には、あの時のまま止まったカレンダーがかかったままになっていた。他人の家に土足で踏み込むことへの少しの抵抗と、15年たっても戻ることも直すこともできない家に対する思いが同時に浮かび、複雑な気持ちになった。

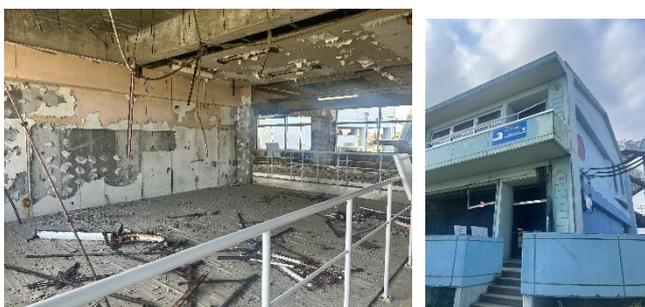


大熊町を車で案内いただく中では、ソーラーパネルが広がる地帯や家の前に柵がおかれている場所を目にし、住めなくなってしまったという現実を目の当たりにした。誰かにとってふるさとだった場所が簡単に踏み入ることすらできない場になってしまっていることが苦しく、その場の未来がどのようなようになっていくのだろうと考えた。

沿岸部ツアー

東日本大震災原子力災害伝承館と請戸小学校を訪問し、原発事故と津波被害について学

んだ。原子力災害伝承館では、原発事故について、原発誘致の歴史から今後についての展示がされていた。請戸小のお話は福島を訪問する以前に聞いたことがあったが、実際に校舎を訪れ、海と避難先の山を同時に見ると、全員無事だったことが奇跡のようにも思えた。残された校舎のうち、波にのまれた一階部分は壁がはがれている様子なども見ることができ、津波の威力の恐ろしさを感じた。また、二階の教室では、震災から10年後に書かれた当時請戸小に通っていた方たちの文集を見た。そこには、一人一人の被災の記憶と請戸に対する思いが紡がれていた。ほとんどの人が10年経っても請戸の地を離れており、災害によって話された人々が中々戻れない現実にもここでも直面した。請戸小訪問後は、当時小学校にいた人たちが避難した先の大平山にある霊園に訪れた。そこからは請戸の地が一望できたが、一面緑に覆われていた。以前はそこにあったはずの人々の生活の痕跡がなくなっていることに対するむなしさと、山から見える小学校の遠さから感じられる避難の凄さを感じ、俯瞰から眺めることで新たに感じられるものもあることを学ぶことができた。



富岡町メガソーラー

富岡町メガソーラー発電所では、施設担当者の猪狩さんより施設概要等についてお話を伺った。見学させていただいたメガソーラーは、65名の方から借用している40ヘクタールの土地に、11万枚以上のパネルが敷かれていた。20年の運転計画のうち今年が7年目の年だそうだ。しかし、年月が経つことによる土地所有者の相続問題なども起きていることから、20年後、さらに事業を続けることは現実的ではないと話されていた。再生可能エネルギーの普及ためにはじめられた事業であるが、その裏に潜む解決すべき問題がたくさんある現実、本事業の今後のことを現実的に考えている人はどれだけいるのだろうと疑問に思った。現代の新しいエネルギーが、良いことだけではないことをまた改めて実感する場であった。

宝鏡寺伝言館

伝言館では、まず丹治さんのお話を聞いた。原発事故について、リアルな数字と表現でいかに深刻な被害であるかを教えていただいたことで、いかに福島の地がまだ危険な状況であるのかを感じることができた。今福島で起きている問題として、地域の分断や情報操作、賠償金の



問題、放射能の安全神話、イノベーション・コーストなどについて指摘されており、元の福島に戻って元の暮らしをしたいという願いが叶わないことを言及されていた。また、伝言館の展示では、福島の地で原発の誘致がどのように行われたのか、また昭和の時代にエネルギー政策がいかに安全だと吹聴されてきたのかということを知ることができた。

古滝屋考証館

旅館の中にある考証館で、資料アーカイブや展示から、原子力災害の多岐にわたる問題について考える時間を得た。中でも、地震と津波により家族を亡くされた木村さんの展示が印象に残った。家族を亡くしてしまうだけでも辛いことであるのに、娘さんの遺体が見つからず、また原発事故により探しに行くことも出来なかったことに、地震と津波に加え原発事故も絡む複雑な問題を抱えていた福島の被災地の深刻さを実感した。また、瓦礫の中から見つかった実際に娘さんが来ていた洋服やランドセルが展示されていた。手に取って感じられる展示として飾られていたが、それに手を伸ばすというだけでも胸を締め付けられるような思いがあり、家族を亡くす苦しみと探せない悔しさに胸が痛んだ。また、企画展では、中間貯蔵施設の課題と問題点を考えるパネル展が行われていた。中間貯蔵施設についての知識が不足しており、パネルに書かれた土地の契約や今後起こりうることにただただ衝撃を受けた。このような重大な問題が起こっているのに、あまりにもそのことに対する知識が不足していることが恥ずかしく感じた。一方で、この地に訪れないとそれを問題として捉えられなかったかもしれないと感じられ、現地を訪れ様々なことを見聞きしたからこそ、証人としての役目を果たし、他者に伝えていく必要があると考えた。



おわりに

本プロジェクトの実習では、多くの方から語りを聞かせていただき、そのそれぞれの語りから様々なことを考えた。震災から14年たった今、被災当時の出来事を鮮明に語ってくれた方も1人ではなかった。私たちがそのような語りを聞くことができたのは、先生がこれまでこのプロジェクトを続けてこられたことでできた関係があったからこそ得られたものだろうと考える。このような貴重な機会をいただけたことに感謝し、ここで得られた経験をまた他の人に伝えていくとともに、自分自身も被災と復興について考えることで、未来で起こるかもしれない大災害への備えとしていきたい。

最後に、本プロジェクトを通して関わってくださったすべての皆さまに心より感謝申し上げます。

2025年度 家族応援プロジェクト 活動報告

人間科学研究科 実践人間科学領域 吉野花保

はじめに

2025年8月28日～2025年9月1日まで「家族応援プロジェクト」に参加しました。本活動は、震災を経験した地域を実際に見学し、現地の方々の声を聞くことや施設を訪れることで、震災の記憶を学び、次の世代へと伝えていく「証人」になることを目的としています。出発前は、震災や原発事故の印象が強く、今現在福島はどのような状態になっているのかという不安がありました。実際にプロジェクトに参加することで、人々の温かさや自然に触れることができました。その一方で、県外の方が想像している「復興」とはギャップがあることや原発と戦っていることなど、表には表れない問題があることが分かりました。報道だけでは伝わらない現地の状態を肌で感じることができ、改めて福島の大変さを学ぶことができました。ここでは、参加したプロジェクトの概要と感想を踏まえながら、活動報告としてまとめていきます。

1. 活動スケジュール

《1日目》

- 15：30～16：15 アウシュヴィッツ平和祈念館（自主学習）
- 17：30～20：30 被災者2人のお話を聞く

《2日目》

- 10：00～10：45 「うたと遊びと漫画トーク」「わらべうたと伝承遊び」
- 11：00～12：30 「団士の漫画トーク」
- 17：00～18：30 みんなの家 中鉢様よりお話を聞く

《3日目》

- 13：00～15：00 「新地語ってみっ会」「みやぎ民話の会」の方と交流
- 17：15～18：00 おれたちの伝承館
- 20：00～21：00 丸山様にお話をお聞きする

《4日目》

- 8：00～9：00 沿岸部ツアー
- 9：00～11：30 小幡様宅訪問
- 午後～17：30 東日本原子力災害伝承館 請戸小学校 見学

《5日目》

- 8：45～9：30 メガソーラー発電所見学
- 10：00～12：00 宝鏡寺伝言館見学
- 13：40～14：40 古滝屋内 考証館見学

2. 活動報告

被災体験について

私は、1日目の夜に被災されたお二人から当時のお話を聞くことができました。被災者以外の方は、何らかの媒体でフィルターがかかった状態でしか見たり聞いたりすることがないため、当人からのお話の内容はどれも生々しく、私が想像する以上に過酷な状況であったことを強く感じました。いつもと変わらない生活を送っていたのに、地震が来た瞬間に今までとは全く別の暮らしをしなければならぬ辛さや怖さというのは、実際に聞かないと分からないものだと思います。避難所での生活では、プライバシーの無い空間での不自由さや、物資が少ないという不安、周りの人々と支え合わなければ乗り越えられなかったという実情をお話してくださいました。また、原発事故の発生時には状況も分からない中突然の避難所移動を強いられ、どこに向かえばいいのか、どこが安全なのかも情報がないまま移動せざるを得なかった様子が伝えられました。土地柄的に地元で仕事をしている人や先祖代々その地域に住んでいる方が、地震をきっかけに仕事も家も生活もすべてなくなってしまったというお話は聞いてとても心が痛みました。このような機会があったのは、先生方が時間をかけて信頼関係を構築してくださったことや15年という年月を経たからこそ聞けた貴重なお話だと思います。自身に辛い体験を初対面の私たちに話してくださったことはとてもありがたく、このようなお話を後世に伝えていかなければならないと感じました。



↑被災体験を話してくださった渡辺さん

わらべ歌が作り出すもの

2日目には、白河市立図書館「りぶらん」中会議室にて、「うたと遊びと漫画トーク」「わらべうたと伝承遊び」が行われました。私は、スタッフとして参加しました。このイベントでは、子連れのお母さんや年配の方まで幅広い年代の地域住民の方が参加していただき、わらべうたや伝承遊びを行いました。このような機会がないと、交流するきっかけがなかったような方も遊びを通して楽しまれていました。私は特に子どもを連れてきたお母さんが印象に残っており、プログラム中に、子どもがお母さんのところを離れ、いろいろな参加者のもとを周っていました。参加者の方もその子どもを可愛がりながら一緒に遊んでおり、お母さんもその様子に安心して無理に引き留めることしていませんでした。同じ地域に住んでいても普段は交流が少ない方たちが子どもを通して会話が生まれている状況がとても良いと感じました。またお母さんも、「お母さん」としての役割から一旦離れ「一人の女性」として楽しまれていたので、リラックスできる空間になったのかなと感じました。最初から参加していくと、だんだんと参加者の表情が明るくなってきたりコミュニケ

ーションが活発になってきたりする様子を観察することができました。地元のわらべうたや伝承遊びを通して、気持ちが解放され緊張が和らいでいくのを実感し、地域の文化を大切にしながら、一緒に過ごす時間の重要性を感じる貴重な機会となりました。わらべうたは子どもの遊び歌ではなく、世代を超え受け継がれてきた文化であり、人と人を自然になく役割を持っていると感じました。わらべうたを教えるのではなく、「一緒に同じ場所で楽しむ」ことが大きな魅力の一つだと思いました。



↑実際の様子

民話と出会って考えたこと

ここでは、101歳の小野トメヨさんに5つほど民話を聞かせていただきました。私自身民話を聞くのは初めてでしたが、トメヨさんのお話の仕方がとても上手く、101歳でも力強い口調で惹きつけられるように聞いていました。実際に語りを聞いてみると、文字で読むのとは違い、言葉の温かさ多臨場感を味わうことができました。また語り手の声の抑揚や間の取り方によって民話の世界に引き込まれ、お話を楽しんで聞くことができたのも、民話の魅力だと感じました。民話は、最後にはクスッと笑えるような内容で、今でもその文化が残っており、お祭りが開催されるなど、地元で根付いていることが分かりました。語りの1つには、人々が日々の日常生活の中で大切にしてきた知恵や子どもたちに伝えたい教えなどが反映されており、長い年月を経て今に受け継がれていることが素晴らしいと思いました。どの話も素朴でありながら力強い教えがあり、東北の人々の優しさや暮らしの知恵を感じることができました。新地は、相馬藩と伊達藩の戦いの地だったこともあり、両家顔合わせの際には、藩の土地ごとに文化が異なるということを知ることができました。また最後には、震災当時のお話もしてくださいました。今まで津波が来たことがない地域だったため、津波に対する認識が甘くここまで怖いものだと思わなかった、と教えてくださいました。被災を経験した方から聞くお話はリアルなもので、想像をはるかに超えていました。みなさまからのお話を聞いて、「とにかく逃げる」ことの重要性や「自分の命は自分で守る」ことがどれだけ大切かを感じることができました。自分の住んでいた家や土地が津波によって流され形が崩されるほど変貌してしまったという体験は、絶対に後世に語り継いでいかなければいけないと感じました。



↑101歳のトメヨさん(左から2番目)



↑自身の被災体験が書かれた紙芝居

被災地・避難区域を巡って見えた現実

プロジェクトの中盤には、中筋様同行のもと、福島の避難区域や沿岸部ツアーなどに参加させていただきました。実際に車から降りて沿岸部を見学した際には、地域住民と政府のお話を聞くことができました。当時震災の被災者となった方々は15年と時を経てだんだんと世代交代が進んできている中、その土地に対する情熱の違いや意見の不一致などで市民の団結力が弱まっているところで、土地開発を行っているとお聞きしました。その土地に住んでいた人が一生懸命守ろうとしているのに、国は静かに開発を行っているということに怒りが沸いてきました。沿岸部には、今後の津波の被害を少しでも抑えようと、植林していたり防潮堤を作ったりしていたが、正直あの高さで足りるのか、木の量は足りているのかなど、疑問に思う部分がありました。今後の津波に備えての対策をしているということをアピールするためなのではないかという気持ちも少し出てきてしまいました。高台から町を見てみると、何もない綺麗な平地になっていました。そこには本来家があり、人がいて栄えていた町だったのに、その片鱗が一切見えないほど何もなくなっていました。被災地に訪れる前は、「綺麗に整備されているなら良いのではないか」と思っていたが、実際に訪れて地元の方のお話を聞いてみると、ただ整備されれば良いというわけではないことが分かり、今までの自分がどれだけ楽観的に考えていたのか思い知らされました。15年という時間と共に、被災に遭った住宅や施設は全て取り壊され、何もなかったようにきれいに更地になっていました。その光景は、一見きれいに見えるが、その裏には震災をなかったことにしたり住民の気持ちに蓋をしたりしている行為にも見えました。見慣れたふるさとは、復興と共に新しい整備された道路ができ、全く新しい町に変わってしまった、ということは地元の方からすると、言葉では言い表せないほどやるせない思いがあるだろうと想像しました。





↑新しく作られた堤防と植林

失われた暮らしの跡に立って

今回私たちは特別に、大熊町の帰還困難区域にあるお宅に訪問させていただくことができました。まず、訪問するお宅の小幡様に注意事項や現状などをお話してくださいました。そこでは、ここまでどのようなことがあったのか、家がどのような状態なのかを話されていました。何度も「汚くしていたわけじゃない。綺麗だったんだけどね。」というようなことを言葉にされていたので、思い出がたくさん詰まった家やその土地が大好きだったのかなという様子が伝わってきました。その後、大熊スクリーニング場に向かい、個人情報名簿を書き、それぞれに防護服と放射能測定器が配られました。車には、「住民一時立入車両通行証」が置かれ、警察がいるゲートをくぐり帰還困難区域へと入りました。テレビなどでも見たことがなく、私にとって初めての体験となり、その光景は想像を絶するものでした。家の中は、15年の月日を経て荒れ果て、野生動物に荒らされた跡や、泥棒によってものが散乱された様子を伺うことができました。その様子は、「汚れている」「ものが倒れている」という単純なものではなく、それまで住んでいた方々の生活や日常生活の何気ない空気感、思い出が無残に跡形もなく壊されてしまったという現実を突きつけるようなものでした。自分が暮らしていた家が野生動物に荒らされる苦しさや、同じ人間でありながらも悪さをする人の心を目の当たりにして、とてもやりきれない気持ちになりました。原発事故が起こるまでは普通に暮らせていた家が、15年間誰も戻れない「無」の時間が流れているように感じました。カレンダーがそのまま残されていたりクリーニングした洋服がかかっていたり、当たり前にあった日常が急に奪われたということ強く感じました。このような家の状況から、震災と原発事故が地域住民の生活に及ぼした影響の大きさを感ずることができました。実際に自宅に訪問させていただき自分の五感を使って経験することで、文字や映像で目にするのとは比べものにならないくらいの学びを得ることができました。この体験を通して、震災の被害は、避難生活やインフラの停止といった目に見える被害だけではなく、人々の日常生活や精神的な心の拠り所までも奪うということを改めて認識しました。今後は、インフラの整備などの物理的なものに限らず、「今までの生活と思い出をどう作り直していくか」という視点で考えていくことが重要で

あると感じました。また「復興」とは、誰にとっての何の復興なのかを改めて見つめ直す必要があると思います。



震災遺構を見て感じたこと

4日目の午後からは、福島県浪江町にあり、現在は震災遺構として保存されている小学校の「請戸小学校」へ向かいました。そこは、当時の震災被害のまま残されていて、高いところに丸太が挟まっていたり小学校で使用されていたプリントが残されていたりして津波の様子がそのまま映し出されているようだった。教室の窓が無くなり、窓枠も津波の威力で曲がっていて言葉にできないほどの迫力があり、映像や文章では伝わらないほどの震

災の重さを感じることができました。角には津波によって調理室の道具が詰められていたり学校として使われていた痕跡が残っていたりして、いつもの学校生活が突然奪われたのだろうということを痛感しました。請戸小学校も時間とともにだんだんと崩れてきている部分があるため、被害の状況が分かる今、一度自分の目で感じることで良かったと思います。児童と先生方が全員避難できて無事だったという事実は、日頃から津波や自然災害についてしっかりと考えているから、連携が取れているからだろうと思いました。避難経路を高台から確認すると、大人からしても結構な距離があったように感じました。その距離を先生方が先導し、全員の命を救えたのは、奇跡に近いことなのかなと思いました。震災遺構として保存されているので、忘れないようにするための材料にするのではなく、どのように生き延びていくのか、そのように命を守っていくのかを学ぶために活用する教材であると思いました。請戸小学校から、「復興海浜緑地」として整備している土地が見えました。「復興海浜緑地」として、今後の災害の際に役立つようにという意図で作られているため、地域の安心を守る意味では良いのかなと思いました。しかしここは、「復興」と名前についているが、パークゴルフ場を併設していることが分かりました。震災で大きな被害を受け、今でも一生懸命生活している人がいるのに、このような娯楽施設が作られていることに複雑な思いを抱きました。震災前までこの地域に住んでいた人や生活を失った人にとって、その場所は人生の一部になり思い出がたくさん詰まった場所であるのに、レジャー性の強い施設を作られるということは、震災の痛みや記憶を置き去りにしているように感じました。客観的に見れば「遊び場」とも受け取られてしまう場所を作るのは、地元の人々の気持ちを踏みにじっているような感じがしました。



↑教室の様子



↑「復興海浜緑地」として整備されている



↑壁と柱の間に挟まった丸太

遺された品と向き合って

最終日は、古滝屋内にある考証館にて、家族を亡くしたお父さんがやられている展示を拝見しました。大切な妻や娘、自分の父親を亡くしながらも懸命に探し続ける姿は心を打たれました。家族を亡くし辛い思いをしているのにも関わらず、誰かのためにと、娘の服やランドセル、写真を展示してくださっていることに強い覚悟を感じました。家族を亡くした悲しみは想像してもしきれないが、展示を見たからにはしっかりと受け止め、被害者の覚悟を無駄にしないようにしようと思いました。また同じ場所の商店街を震災前後で比べている写真の展示では、震災を機に町から人がいなくなったことや被害を受けて時間が止まっていることが表されていました。震災前は賑わっていたのだろうなという印象を抱く商店街だが、震災後の写真では建物が無くなっているなどして、そこで働いていた人たちは職も奪われてしまっただろうと思いました。さらに原発のことについても展示されていて、普段ニュースで得るような知識とは違い、地域の人々の生活や体験を通してリアルに立体的に学ぶことができ現実味がありました。原発事故があった福島の方は、日々東京電力と戦いながら葛藤して生活していることが分かりました。「福島県民ではないから関係ない」「15年前のことだから」と思わずに、今後の日本をどうしていきべきか、復興とは何かを考えながら、原発についても積極的に学ぶ必要があると改めて感じました。



↑ 汐風（ゆうな）ちゃんの遺品



↑ 同じ場所から撮影した商店街
震災前（上）震災後（下）

おわりに

今回の「東日本家族応援プロジェクト」への参加を通じて、私は震災の爪痕や人の暮らしの変化を、自分の五感で感じ取ることができ忘れられない貴重な経験となりました。震災から15年以上だった今でも、帰還困難区域には人々の生活は戻らず、家が荒れたまま残されている様子や、震災遺構として保存されている建物から伝わる当時の緊迫感は、実際に訪れてみないと分からない、言葉では表現しきれない重さがありました。被災された方の生の声は、ニュースや書物から得る情報とは比べものにならないほどの重みを持っていました。また、実際に亡くなった方の遺品や記録資料を拝見し、被災地の現実が過去の出来事ではなく、今もずっと課題であり続けていることが分かりました。

一方で、地域の方が震災を語り継ぎながら未来に向けて力強く進んでいる姿にも驚かされ、人と人とのつながりや記憶を伝えていく大切さを学ぶことができました。失われた命や生活の重さを前にして、ただ耳を傾けることしかできなかった自分の無力さも痛感しました。だからこそ、震災の記憶を忘れず、次世代に語り継いでいく事が私たちの責任であり、「証人」としてできることだと強く感じました。

今回の活動を通して、ただ震災の知識を深めることだけではなく、「自分自身がどのように震災を向き合い、どのように次世代に伝えていくか」を考えるきっかけとなりました。このような意識を常に忘れることなく、今後は、この経験を語り継ぐ一人でありたいと思います。

謝辞

このプロジェクトで得た経験は、私にとってかけがえのない学びとなりました。今後の被災地の現状に関心を持ち続け、日常の中でできることを考え、実践していきたいと思えます。最後に、このような貴重な機会を与えてくださった関係者の皆さまに心より感謝申し上げます。

「東日本・家族応援プロジェクト+2025」に参加して
博士課程後期課程 河野暁子

2018年から継続的に参加してきたプロジェクトに、今年も参加した。久しぶりにお会いできた方々や、今回初めてお会いする方々など、多くの方と今年もお会いすることができたことに感謝したい。

初日夕方の集合前までは、各自のフィールドワークで、私は飯舘村を訪ねた。フレコンバッグがすべて中間貯蔵施設に運ばれたと聞いていたので、それを確かめたかった。そして、村本先生、団先生と福島市の極久里珈琲を訪ね、双葉町から避難されている方々のお話をうかがった。避難当時のお話からは、私の想像をはるかに超える事態であったとのだと感じた。白河市でプロジェクトメンバーと合流後は、おひさまひろばさんとの交流会で、そこで避難されているお二人のお話を聞かせていただいた。避難時の状況がどれほど困難であったのかが、ひしひしと伝わってきた。

翌日は、おひさまひろばさんとプログラムを開催した。歌や手遊びは、参加者の垣根を越えて、誰もがほっこりするプログラムであった。団先生の漫画トークは、私自身の家族のことも振り返る時間となった。白河市を離れ、夕方は福島市の放課後児童クラブみんなの家を訪ねた。ここでは、震災と原発事故当時から最近までのお話をうかがった。

3日目は新地町に向かい、民話の会のみなさんとの交流であった。101歳のトメヨさんの民話はとても聴きごたえがあり、ずっと聴いていたくなった。夕方からは南相馬市のおれたちの伝承館へ。アート作品からは、言葉を超えて、苦しみや悲しみなどの様々な声が響いてくるようだった。

4日目からは、おれたちの伝承館館長の中筋さんの案内で、フィールドワークへ。初めて大熊町の帰還困難区域のお宅へ入らせていただいた。スクリーニング上でチェックを受け、防護服を着用し、ご自宅へ入らせていただいた時、荒れ果てたご自宅に衝撃を受けた。

最終日は、富岡町のメガソーラーや送電線を見学した。ここで作られた電気が遠く関東へ送られていることを想像し、私たちが使う電気がどう作られているのか、もっと知らないといけないと思った。その後、楡葉町にある宝鏡寺の伝言館を見学した。ここでは、原発は核の問題と同じなのであると、改めて気づくことができ、また事務局長の丹治さんのお話からは、原子力災害は簡単に解決するものではないことが分かった。

今年も限られた時間の中で、とても多くのことを学ばせていただいた。今後も原子力災害に関心を持ち続け、できるかぎり福島へ通い、人々の声に耳を傾け、調べ、周りの人へ伝え、自身の行動を決めていきたいと思った。

最後に、プロジェクトでお世話になりましたすべての方々に、心より感謝申し上げます。